

4-3 水と生活文化

琵琶湖周辺には、古くから水によって育まれてきた生活文化が多く残っています。それらは、琵琶湖湖水を生活用水として利用することより、周辺の川や湧水の利用によって独自に形成されてきたものであることが、特徴としてあげることができます。

1. 泉神社湧水

国の水質保全行政の一つとして、当時の環境庁が1985（昭和60）年に定めた名水は、「昭和の名水百選」と呼ばれ、滋賀県からは彦根市十王村の水と米原市泉神社湧水が選ばれました。

標高1377mの伊吹山は、近江盆地北東部の岐阜県境にそびえる滋賀県一の高峰で、この南麓扇状地上に、

米原市（旧坂田郡伊吹町）大清水の集落があり、古くは大泉村と称して氏神である泉神社の麓の谷間からわき出る湧水にその名は由来します。

現在、神社前に湧水が導かれて「御神水拝受所」があり、一日あたり4500t湧く水を求めて、年間数万人とも言われる来訪者のための駐車場やトイレも設けられ、地元の方々の大変な努力によって運営・管理されています。



写真4-3-1 泉神社湧水

2. 針江のカバタ

湖西の高島市針江地区では、安曇川の伏流水が豊富に湧き出て、各家は庭先や台所の一角に湧水を溜める池をつくり、日常生活に利用しています。これが「カバタ」と呼ばれています。これらは、「針江の生水」として環境省から「平成の名水百選」にも選定されました。代々受け継がれてきた伝統的な「カバタ」の利用をめぐる生活文化を活かして、地元では独自の取り組みを行ってきました。それは、「カワザラエ」という清掃活動や地元同士で天然洗剤使用の勧め合い、環境保全行事のイベント化、ビオトープの設置、子どもを対象とした生物や環境の観察会の開催などといった、地元独自の水環境を支える仕組みです。また、地元の人々は、世界湖沼会議や地域交流会にも積極的に参加し、交流活動を行っています。

地元の人々が語るように「水をみんなで守っていく」中で、水路や針江大川にはアユやビワマスなど稀少な淡水魚も遡上し、また「カバタ」文化を「知る・体験する」人も次第に増え、人気を誇っています。



写真4-3-2 針江のカバタ

3. 海老江の水利用

針江の「カバタ」に似た水利用の習慣は、湖北の長浜市海老江の集落などにもあります。そこには、それぞれ独立した3段構えの水槽が、各家の軒先に備わり、自噴水がいつも上から下の水槽へ流れています。多くは3つの長方形からなり、夏には水槽でナスびやキュウリ、ウリなどを冷やしたり、また漬け物づくりや生活用水として日常的に地元で使われています。



写真4-3-3 海老江の水利用

4. 水文化の資源化

琵琶湖の周辺では、現在も「カバタ」（「カワト」とも言う）「カワト」といったような水利用の文化が継承されつつある一方、名水百選に代表されるような湧水利用地域では、地域活性化へつながる大切な資源としてさらに広く利用されるようになっています。